21 世紀台湾文学が描く戦争の歴史と記憶—呉明益小説を中心に—

明田川聡士

（獨協大学准教授）

呉明益（1971 年生）は現代中国語圏文学を代表する作家である。呉明益の代表作である長編小説『単車失窃記』（邦訳：自転車泥棒、2015）は 2018 年に国際ブッカー賞のノミネート作品となり、世界的にも注目された。日本でも同作を中心に、この十年ほどのあいだに呉明益小説が何冊も翻訳出版されており、広く関心をよんでいる。

呉明益自身が文芸創作と同時に、環境保全活動にも深く関わっていることから、彼の小説創作は環境問題をテーマ化した作品が多く見られる（たとえば、いずれも長編小説の『複眼人』（複眼人、2011）、『苦雨之地』（雨の島、2019）、『海風酒店』（未邦訳、2023）など）。一方、それと同時に、描き出される物語が自然環境だけではなく、人間や社会の記憶の問題にも深く関わっていることは軽視できない。なかでも『単車失窃記』や長編小説『睡眠的航線』（眠りの航路、2007）などでは、戦争をめぐる記憶として表現されていく。

こうした戦争と傷痕をめぐる創作は、実は呉明益小説特有のものではなく、戦後台湾文学においては何度もテーマ化されてきたものでもあった。前世紀をとおして台湾社会は、日中戦争、アジア・太平洋戦争、国共内戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争など、数々の戦争に組み込まれてきたため、従来の台湾文学作品では、そうした戦争の記憶を取り上げる作品が少なくなかった。ただし翻って呉明益の戦争記憶を扱う小説に注目してみると、そこでは従来の作品のようにエスニシティのちがいによって生じた人間の衝突を物語化するのではなく、むしろ双方による和解の物語として成立させる傾向が多いことに気づかされる。

本報告では、まず台湾文学において先の諸戦争がどのようにして物語中で描写されてきたのか、その変化の過程を整理し、そして次に呉明益小説で表現される戦争記憶をめぐる特徴とその背景について検討したい。